

## 「農村女性ビジョン」の時代

中島紀一（茨城大学）

このところの学会大会での諸報告を総覧してみると、かつての農村生活研究との基調の違いが tydよく感じられる。多く取り上げられているテーマは、「農村女性起業」「6次化」「輝く農村女性たち」などであり、それらは主に成功の記録、紹介、分析となっている。背景には恐らく、現場での女性たちの諸活動の進展があるのだろう。これらの報告を読むと、多彩な学びが得られるし、気持ちも明るくなっていく。

しかし、明るい成功事例を紹介するだけでは、研究としてはいかにもものたりない。

最近の報道では女性起業は総数では頭打ちで、グループ経営はかなり大きく減少したが、個別経営は引き続き増加し、それが半数を超えたそう（農水省調査 2014 年度）。この調査の最初は 1997 年で、その頃はグループ経営がほとんどだった。グループ経営の多くはかつての生活改善グループ育成の流れの中での取り組みだったのだろう。起業数の増加はその後 10 年ほど続き、そこまではグループ経営も個別経営もともに増加していたようだが、2007 年からは起業数は頭打ちとなり、グループ経営は減少に転じ、しかし、個別経営の増加は続いている。

たとえばこんな動向を農村生活研究はどのように捉えていったらよいのだろうか。

農村女性起業などの活動を強く奨励したのは「農山漁村の女性に関する中長期ビジョン」（「21 世紀農村女性ビジョン」1992 年）だった。このビジョンの果たした役割はとても大きかった。国からのこの提唱に、生活改善の普及職員も励まされたし、現場で頑張ってきた農村女性たちも大いに元気づけられた。また、農村地域社会も、ビジョンやそれに主導された諸活動をおおむね歓迎してきたように思われる。そんな「農村女性ビジョン」の提唱からもう四半世紀もたった。振り返ればそれは一つの時代だった。

だが、言うまでもないことだが「農村女性ビジョン」の時代はバラ色の時代ではなかった。

それはまず農業の絶対的な縮小の時代だった。社会全体として食は栄えてきたが、農は衰退し、食を支える農の態勢は崩れていった。食料自給率の低下はそのことを端的に示している。農村社会も、農業・農家の要素が大きく後退し、たとえば純農村地域の小学校でも親の職業を問えば「農業」との答はごく希になっている。そんななかでも元気な主業の農家は頑張ってきたが、客観的には地域の少数派になり、孤立化も懸念されるようになっていく。農家の、そして地域の暮らしの中に定着していたさまざまな年中行事は、遺されたもの珍しい文化として扱われるようになってしまった。

普及事業もこの時代に大きく様変わりした。21 世紀になると普及制度は大改変され、「生

活改良」の部門もなくなり、「生活改良普及員」は制度として廃止され、さらに「改良普及員」という名称も「普及指導員」に改称され、現在に至っている。普及事業はその後も継続されているが、普及センターでの活動の現状はかなり大きく変わっているようだ。たとえば、かつて生活改良普及員は、まずは担当地域の暮らしの現状をつぶさに調査して、そこから普及課題を見つけ、地域のオルガナイザーとして活躍していた。しかし、現在では、行政等の事業推進が普及指導員の仕事の大きな部分を占めるようになり、そこでは事業等の数値目標達成が重要な推進要因になっている。

すでに一時代をなすに至った「農村女性ビジョン」の時代に、女性起業や6次化などの活動成果はみなを励ましているが、その背景にはどんな環境変化があり、何が成し遂げられ、何が失われてきたのか。もう農村生活問題などはなくなってしまったのか。そんなことについても農村生活研究の基礎として、しっかりと考え合っていくことも必要だと思う。

## 「個」と「孤」の時代から新しい共生の時代へ

### ——組合員の生活ポテンシャルと農協の可能性——

中島 紀一（鯉淵学園）

#### 1. むらは変わった

私の家は茨城県中央部の純農村の少し高台にある。毎朝、家の窓から眺めるむらのたたずまいは「穏やかな悠久のむら」を感じさせられる。だいぶ以前のことだが、そんな私の村の小学校で子どもたちに「家の人の仕事は？」と聞いてみた。答えは9割くらいがなんと「会社員」。統計的規定からすれば住民の8割は「農家」であり、当然ほとんどの家は農協の組合員という地域での話である。統計的には「農家」であったとしても、子どもたちの目からみれば、「自分の家は会社員」というのが素直な感覚なのだ。「悠久のむら」も内実は大きく変化しているということなのだろう。

小学校ではスポーツ少年団などの課外活動も盛んで、子どもたちは毎朝の朝練、土日の試合・練習と忙しい。親たちは会社の勤務をやりくりしながら子どもたちの送り迎えに懸命だ。子どもたちの家の暮らしの実態はもう昔ながらの「農家」ではない。若いお母さんがたも、結婚の際には彼の実家は農家で、農家の嫁になるという意識は多少あったとしても、自分たちが夢見る新家庭を「農家」としてイメージした人は多くはないだろう。

もちろん家には田畑や山林があるし、家のたたずまいも農家的であり、多世代同居（直系家族）が普通の形だ。隣近所の関係も昔からの顔見知り関係である。しかし、すでにむらの暮らしは、戦後、農協が発足したところ、すなわち戦後自作農による均質社会の時代とは大きく変化している。農村は、定住的ではあるが職業的には多様性のある住民が構成する地域社会に移行していることは明らかである。

#### 2. 新しいタイプの農村地域社会の形成へ

従来こうした現象は「都市化」「混住化」「脱農化」等の概念の下で理解されることが多かった。1970年代、80年代にはたしかに事態はそのような方向へと動いていた。しかし、1990年代に入る頃から、変化の方向や変化が意味するところはかなり大きく変わってきたように感じられる。

前に述べたむらの変化の意味は、現在という視点からみれば、実は農村地域が単純な意味で「都市化」し「脱農化」するということではなくなっているのではないか。農村はやはり農村らしく、多様性はあるが定住的な農村生活者が暮らす独自の仕組みをもつ新しい共生的な地域社会類型を形作る方向へと向かいはじめているのではないか。農村地域社会は均

質な農家によって構成される地域社会から職業的には多様だが農村らしい地域生活者社会の形成へと変貌、変化しつつある、というのが90年代農村社会の動向についての私の見方である。

実態としてのむらはすでにかなり以前から均質な農家によって構成されるタイトな共同体的地域社会ではなくなっていた。しかしまた、農村地域社会は単なる「都市化」や「脱農化」へと進みつつあるわけでもないようだ。では、農村地域社会はどこに向かおうとしているのか。実はその進路方向がなかなか見定めにくかった。だが、90年代の10年間の経過の中でおぼろげながらそれが見えてきたのではないか。農村らしい地域生活者による新しいタイプの地域社会の形成。進行しつつある農村地域社会の変貌についてこのような意味づけもできるのではないか。いま私はそんな感触を強く持っている。

単なる経済成長に夢をかけるような時代が終わり、「都市化」や「脱農化」などはそれ自体としては魅力的見通しではなくなったという価値観の時代的転換がその背景にはあった。

農村に新しい共生的な地域社会が形成されるかもしれないという見通しを根拠づける要素を列記すればつぎのようである。

①現代の農村地域にはさまざまな産業業種が立地しているが、何よりもそこに農業があり、あるいは林業、水産業などの第一次産業が立地している。そして、活力は著しく低下しているとは言えそれらの第一次産業を起点とする地場産業の産業連関構造を持っている。

②それらの農村的な産業群はいずれも地域の自然的風土的環境に強く規定された構造、特質を形成している。

③人々はそうした自然性の高い地域社会への定住（ほとんどの場合は数世代にわたる定住）を当たり前の生活規範としている。

④それ故に伝統性、安定性、持続性等の要素が社会規範として保持され、重視される。

⑤多くの場合、個々の暮らしのなかに農業や自然を持っており、自給的生活者、すなわち単なる消費者ではなく、自然性豊かな自立的な生活者となることへの回路が開かれている。

⑥生産と生活が同じ地域内で営まれ、農業については多くの場合は生業として営まれ、生産と生活を生活者の視点から統一的に運営していく可能性が開かれている。

⑦個人は多くの場合は家族・世帯として生活しており、地域の社会関係は個人と個人の関係だけでなく、家族と家族の関係が重要な意味をもっている。

⑧地域の社会関係の基本は、顔見知り・相互理解関係であり、かなりの長期スパンでの相互信頼と互惠がベーシックな関係規範となっている。

⑨地域内に多世代の人々が定住的に生活しており、世代ごとそれぞれに社会的に、あるいは生活的に役割を果たす場があり、またその可能性が開かれている。

⑩都市とのさまざまな関係回路、ネットワークを持っており、閉じられた社会ではなくなっている。

### 3. 元気な農業も第三世代へバトンタッチ

農村地域社会だけでなく農業もまた大きく変貌してきた。

戦後日本農業の歩みについては、3つの世代交替という整理がわかりやすい。

なお、このような世代交替論を最初に提起されたのは安達生恒氏である。詳しくは同氏の『今、農業第三世代が面白い』楽遊書房、1992年を参照されたい。

戦後日本の農業、農村の出発は農地改革にあった。地主・小作関係などかなりの異質化要素を内包していた日本の農村社会は、農地改革による地主制の解体とほぼ均質な自作農の創設によって、相当に同質性の高い自作農社会として出発することになった。新しく誕生した自作農はほぼ横一線に並んで食糧増産に取り組んだ。

しかし、高度経済成長の進展は、このような均質モデルの第一世代農業を激しく揺さぶる。それへの対処として設定された旧農業基本法＝農業近代化政策は、農業中心で暮らしをたてようとする農家に対して選択的拡大、近代化農業の道を提示した。今日の専門的農業経営のほとんどはここに出発点があった。農業近代化の流れのなかで育っていった新しい農業の担い手たちを戦後農業の第二世代と位置づけることができる。

さらに1980年代中頃を画期として日本の農業は第3のステージを迎えることになる。この段階を特徴づける基本要素は、地域社会構成の異質化、社会編成単位の「いえ」から個人への移行、85年プラザ合意、構造調整政策、ガットUR合意、WTOの発足、国際化と市場原理主義の席卷などであった。

この時期、農業経営の一般的外部環境は絶望的に悪化し、通常の経営視点からみれば、生産活動の継続自体が不経済と判断せざるを得ないような状況に陥る。だが、そうしたなかにあっても積極的な可能性を拓きつつある取り組みがあちこちに生まれ始める。＜個性的な暮らし方のなかに時代的価値を表現しつつある魅力的個人農＞、＜ポリシーある戦略的経営としての個別的経営体＞、＜地域農業ビジョンをもった地域的産直事業体＞、＜地域価値の発掘と主体的マーケティングをすすめる地域づくり活動＞などがそれであり、これらの新しい活力を総称して戦後第三世代の取り組みと位置づけられる。

いま多くの農村において、農業だけを職として生計をたてる壮年のプロ農家はむしろ少数派となっており、大勢としての農業は女性・高齢者型の地域産業となっている。だが、戦後農業の第3ステージの現代という条件下にあっては、それは単にマイナスのイメージのものとしてあるのではなく、農村地域生活者にとってのポジティブな意味での農業の一つのあり方として、たとえば定年帰農者の営農意欲や農家直売店の賑わいに象徴されるように、重要な地域活力として機能しはじめている。その意味でいま第三世代型農業の担い手は、かつての第二世代型農業の担い手とは少し違って、多様な形で新たな広がり生まれつつあるとすることができる。

### 4. 農村市民社会の形成とJAの組合員ニーズ

農村に暮らす地域生活者にとって農業の維持や発展はお荷物な課題というだけではな

い。すでにある程度の豊かさを手にした農村住民たちにとって、また、機械化等が進んだ現在の技術状況の下で、農業を暮らしのなかにもつことは、負担というだけではなく、豊かな暮らしのための大切な条件あるいは大きな可能性ともなっている。職業的に多様性のある農村住民たちが、農村という条件を前向きなものとしてとらえ、農業を豊かさへの可能性として活かしていこうとする新しい共生的地域社会のモデル。それを私は「農村市民社会」という概念でイメージしている。

現在の JA の主要な組合員基盤はいわゆる「農家」ではなく「農村地域生活者」だと見るべきだろう。そこで専門的プロ農家をどのように位置付けるかは難しいところだが、彼らも農業を職業とする農村地域生活者の一類型だとの位置付けも有効かもしれない。そしていま、そのような農村地域生活者たちの暮らしのパワーは決して弱くはない。ある程度の豊かさの中にある彼らの生活行動ポテンシャルは引き続き不況の下でもなおかなり高いと評価できるように思われる。

理論的にはさまざまな議論があるとしても、現在の JA は農業者による農業協同組合ではなく、農村地域生活者による農業協同組合だというのが実態的事実である。より正確には、現在の JA の組合員基盤は農村地域生活者であり、したがって協同事業のあり方としても農村地域生活者による農業協同組合として展開すべきにもかかわらず、現実の JA 事業はそのようにはなり得ていないというべきかもしれない。JA は、農村地域生活者たちの多様な生活行動ポテンシャルを組織として、あるいは事業として取り込めずにいるというのが現状なのではなかろうか。

変貌する農村地域社会が自己喪失の混迷に陥るのではなく、農村らしさを活かした農村市民社会として自己形成していくための鍵は、農業を、彼ら、彼女らの暮らしにとってポジティブなものとして実現させていくことにある。出発点は地域生活者一人一人の意思と選択にある。農業は、彼ら、彼女らにとって必ずや好いものであり得るはずである。そのような農業とは具体的にはどんな姿なのか。ここに新しい模索、発掘、創造の課題がある。そこへのチャレンジが 21 世紀の JA の基本的課題となっているのではないか。

いま JA にとって組合員ニーズはより良い地域社会を目指した新しい模索の中から掘り起こすべきものだと思う。JA 組合員は 21 世紀を創る農村地域生活者＝農村市民としてより良く生きたいと願っている。JA は組合員のこうした願いに協同組合としてどのように応えていくべきなのか。JA 組合員、すなわち地域生活者たちに参加可能な、実現可能な農業のあり方を多様な形で提案し、彼ら、彼女ららしい農業を実現させるために出来るだけのサービスを提供すること。新しい時代における JA の役割、使命はこのあたりにあるのではなかろうか。